慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	渡辺誠氏学位請求論文審査要旨
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1996
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.65, No.4 (1996. 6) ,p.127(451)- 135(459)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19960600-0127

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙　報

渡辺誠氏学位請求論文審査要旨

内容の要旨

本論文『日韓交流の民族考古学』は、相互に関連し合う二つの目的のもとにまとめられたものである。

その第一は、わが国にもっとも近い国である韓国との交流の歴史を、民族考古学的研究によってより一層明らかにすることである。いうまでもなくこれまでにも多くの研究が行われてきているし、特に古代における考古学的研究は、わが国の古代文化の形成発展に果たしたところの、朝鮮半島の古代文化の重要性を十分に明らかにしてきている。しかし未解明な分野もあり、誤解の多い分野もある。またその研究対象としての時代が古代にのみ片寄っていたため、新しい時代においては考古学的に明らかにされるべき多くの問題点が残されている。

そしてそのような研究状況の背景に、しばしば日本国内での研究のあり方、あるいは先入観のあることが指摘できる。その代表的な例として、日韓の交流は稲作が伝わった弥生時代に始まるという固定概念を指摘できる。日韓交流は実際にはさらに四〇〇〇年も古く、縄文時代の前期にまでさかのぼるのであり、その担い手の漁民の交流があってこそ稲作も伝わったのである。従来の漠然とした中国の農耕文化の拡散現象とみている考え方は、日韓交流の正しい姿を理解していなかったということができる。

また従来の日韓交流の考古学的研究は古代に片寄り、中・近世の考古学的研究がきわめて不十分であることも指摘できる。確かに現状では韓国の中世考古学は仏教考古学が主体であり、近世考古学は未発達である。しかしそれらを理由に、日韓の中・近世考古学の比較研究がおろそかであってはならない、その背景にある、文化的恩恵を受けたのは古代のことで遠い過去のことであり、近・現代においては大きな影響が無かったとするような考え方に、陥りがちである。

次にその研究の方法としては、伝統的な考古学的アプローチのみに固執せず、むしろそれに対する批判的な姿勢を含めて、民族考古学的研究方法を積極的に行なった。そしてその方法の普遍的な有効性を、具体的な叙述を通して明らかにし、物質文化史構築の可能性を示すことが第2の目的である。

全体の構成は以下の通りである。

第1章　日韓におけるドングリ食と縄文土器の起源

1　ドングリ食の研究史

2　ドングリの種類

3　韓国における遺跡出土のドングリ類

4　ドングリ豆腐――韓国ドングリ食調査1

5　ドングリ豆腐――韓国ドングリ食調査2

6　縄文土器の起源と発達
第2章　朝鮮海峡における漁民の交流
1　縄文時代の地域文化
2　九州縄文文化の特質
3　日本列島における釣針の発達
4　西北九州型結合釣針の分布
5　韓国新石器時代の釣針
6　石鋸装着の銛
7　朝鮮海峡の廻転式離頭銛
8　慶尚南道勒島遺跡の抜歯人骨
9　漁民の交流と稲作の伝播
第3章　全羅南道郡谷里貝塚出土の卜骨
1　郡谷里貝塚と卜骨への関心
2　郡谷里貝塚の発掘調査
3　郡谷里貝塚出土卜骨の検討
4　朝鮮半島における卜骨
5　弥生時代卜骨との関係
6　卜骨と亀卜
7　卜占の内容
第4章　韓国の蘇塗と弥生時代の鳥形木製品
1　蘇塗（ソッテ）への関心
2　全羅南道今江里におけるソッテの民族学的調査
3　韓国民族学からみたソッテ
4　弥生時代の鳥形木製品
5　村落共同体の守護鳥
第5章　滴水瓦伝播の国際的背景
1　滴水瓦の機能
2　滴水瓦製作技法の民族学的調査1
3　滴水瓦瀬作技法の民族学的調査2
4　滴水瓦の伝播1・韓国
5　滴水瓦の伝播2・日本
6　滴水瓦の伝播3・琉球
7　コビキ技法Bの伝播
8　古代桶巻き技法への疑問
9　瓦史の時期区分
第6章　木綿伝播の国際的背景
1　木綿への関心
2　木綿の伝播1・日本
3　木綿帆の発達
4　呉陳官の木弓
5　木綿の伝播2・韓国
6　黄道婆
7　『新木綿以前の事』批判
8　『物質文化史学』の構築

次に各章の意図と内容を要約して記す。まず第1章「日韓におけるドングリ食の縄文土器の起源」は、日韓におけるドングリ食の民族・民俗学的なフィールド・ワークに基づく比較研究

によって、東アジアにおける土器の起源は厳密な意味では不明であるにしろ、実質的には縄文時代・韓国初期新石器時代の主食であるドングリ類の、アク抜きのために発達したものであることを明らかにしたものである。

縄文時代の食料資源としてドングリ類の重要性は、古くから指摘されてきた。しかしそれらは土器の機能や各種の遺物・遺構と関係づけて研究されることはなかった。しかし安易な民族・民俗学的成果の援用に問題のあることも事実である。それを避けるためには、その調査姿勢として残存文化調査ではなく条件調査として行い、条件の一致率を高めたうえで援用すべきである。その条件とは生態学的条件、社会的条件、そして技術的条件である。そして食文化などの社会的条件の違い、さらにそれらによる技術的条件の違いは、日韓にまたがる比較研究によってより鮮明となり、問題の解決につながるのである。

第2章「朝鮮海峡における漁民の交流」は、縄文時代前期以来朝鮮海峡を挟んだ地域では外洋性漁業が活発で、漁民の交流も盛んであったことを、漁具の考古学的研究に基づいて明らかにしたものである。すなわち日本列島に展開した縄文文化は決して閉鎖体系ではなかったことを証明し、かつ韓国に伝わった稲作が、それら漁民の交流によって北部九州に伝播したことを明らかにした。

また佐賀県唐津市菜畑（ナバタケ）遺跡の発掘によって、稲作の開始は従来より三〇〇年さかのぼるBC六〇〇年頃であることも判明している。その一方で青銅製品などの副葬に示唆される階級社会の萌芽はBC一〇〇年頃に下がり、稲作の開始と階級社会の成立とには大きな時代差があり、それらを区別して弥生時代の形成の過程、その裏返しの関係で縄文文化との関係を再検討すべきことを主張している。

第3章「全羅南道郡谷里貝塚出土の卜骨」では、著者が木浦大学校博物館の発掘に参加し、自然遺物について研究する機会を得た全羅南道海南郡郡谷里貝塚出土の卜骨を検討し、弥生時代に伝播した卜骨が形態学的にも出土状態においても韓国に源流があることを再確認した。郡谷里貝塚出土の卜骨は数量が多く、初めて弥生時代出土例との比較研究が可能になったのである。そして従来卜骨・卜甲と一括されてきた両者について、使用階層・地域、わが国への伝播時期、さらには卜占の内容においても重要な差異のあることを明らかにした。

第4章「韓国の蘇塗と弥生時代の鳥形木製品」は、主に著者の民族学的なフィールド・ワークと韓国民俗学の研究成果に基づいて、卜骨と同様に弥生時代にわが国に伝播した蘇塗（ソッテ）・鳥形木製品の性格を検討し、境界神としての性格が強いことを明らかにした。

第5章「滴水瓦伝播の国際的背景」は、古代の百済から初めて飛鳥時代のわが国に造瓦技術が伝播したときと同様に、近世初

頭の滴水瓦の伝播にも当時の国際関係が顕著に反映していることを明らかにした。その伝播時期は文祿・慶長の役と密接に関係しているのである。

これは両国における考古学的調査をはじめ、韓国における民族学的なフィールド・ワークによる技術問題の解明も大きな比重を占めている。また沖縄における考古・民族学的な調査により、同じ滴水瓦でも琉球では直接中国の明朝より伝わっていることを明らかにすることによって、伝播の背景の重要性を明らかにする。

しかし瓦の歴史としては、古代、近世初頭とともに、第3段階として欧米の影響の強い第2次世界大戦後も重要である。そこには一貫して当時の国際関係が顕著に反映していることをみることができるのであり、逆に古代や近世初頭の伝播についてもその特質が明らかになってくる。そこに物質文化史的な研究の必要性があるのである。

第6章「木綿伝播の国際的背景」においては、さらに技術の伝播に及ぼす国際関係の影響について論じている。これもまた韓国における民族学的調査の成果に基づいている。そこには物質資料の国際比較を基礎にした物質文化史の構築の必要性が示唆されている。近年の日本における近世考古学の発達はその可能性を一段と強くしているのであり、考古学が歴史学の一翼を担い、その責任を果たすべき段階に立っていることを主張している。

論文審査の要旨

渡辺君の学位請求論文『日韓交流の民族考古学』は、従来の考古学的な接近法とはことなり、考古学的資料とともに民族学および民俗学的資料を豊富に利用し、独創的な構想で日本と朝鮮半島の交流史を究明したものであり、精度の高い情報と卓越した構成力によって、きわめてすぐれた業績となっている。

従来、考古学的研究において、民俗学あるいは民族学的研究をとり入れ、遺物や遺構の解釈や社会の復元に補助的に利用する場合は多い。しかし本研究はそれを一歩進め、両者を統一した物質文化史の構築を目指している。

第1章　日韓におけるドングリ食と縄文土器の起源――著者は縄文時代の食糧に占める植物質食料の重要性、わけてもドングリ類のもつ価値に注目し、遺跡出土の植物遺体を中心に実証的な研究を積み重ねてきた。本章においてはさらに日本と韓国におけるドングリ食の民族事例を比較し、縄文土器の発達の根底にドングリ加工の問題があることを指摘する。縄文土器の基本的形態は煮沸を目的とした深鉢形土器であり、これは縄文土器の出現期から終末に至るまで一貫している。このことから縄文土器はドングリ類の煮沸がその出現の当初から重要な役割をもっていたと推定する。縄文土器の底部は前期になると平底へと変化し、器形も円筒状になるが、この変化は植物質食料の製粉技術の発達と対応していると考えられる。かくして、著者は

縄文土器の起源をドングリ加工技術との関連においてとらえるという、新しい視点を示したのである。

第2章　朝鮮海峡における漁民の交流――狩猟・漁労および植物採集を主生業とする縄文時代にあっては、多様性に富む日本列島の自然環境に適応することが生存の前提であった。適応の結果として地域文化も多様であり、諸文化を東西に単純化することはできない。文化内容を、生態学的観点をふまえ、狩猟・漁労・植物採集活動に基づく生活文化に限定して、9文化圏に分ける。植生図をタテ糸に、狩猟・漁労の捕獲対象物と環境差をヨコ糸に織り合わせ地域文化を浮かび上がらせる。本章では、朝鮮半島との関係が密接で、独自の地域文化を形成している九州の曽畑・阿高式文化圏について、特に漁労文化を中心に考察されている。九州地方の縄文文化が地域性を顕著に現すのは、縄文前期の曽畑式期からである。その源流は朝鮮半島の櫛目文土器文化に求められる。曽畑式土器文化に始まる地域伝統は、弥生・古墳時代を経て、後の時代にも根強く引き継がれることになる。西北九州と朝鮮半島との交流の実体は、朝鮮海峡をはさんだ両地域間の外洋性漁業の展開にある。その主要な漁具として西北九州型結合釣針、石鋸を組み合わせた銛、廻転式離頭銛の三者がある。それらは西北九州に集中的に分布するばかりでなく、韓国南部にも出土している。

外海に面した西北九州の多島海地域には、西北九州結合釣針が分布し、しかも7センチメートル以上の大型のものばかりである。佐賀県唐津市菜畑遺跡の曽畑式土器に伴う4本の釣針は、朝鮮半島との関係を暗示している。韓国の釣針は新石器時代から原三国時代にかけて大部分は慶尚南道の海岸部に集中して分布し、櫛目文土器文化の早期から出土する。黒曜石製の石鋸と西北九州型結合釣針は西北九州地方において分布範囲がほゞ重複し、かつ沿岸部のみに出土する。朝鮮半島では北部の咸鏡道と南部の南海岸とに分布が二分される。廻転式離頭銛は、韓国では慶尚南道熊川貝塚から出土している。また慶尚南道三千浦市勒島遺跡から出土した抜歯のある人骨は西北九州の曽畑・阿高式文化圏との関連を示している。

韓国南部と西北九州との多島海地域という類似した環境に展開した外洋性漁業は、必然的に両地域漁民の海上での交流をもたらした。この交流は縄文時代前期からたえまなく続き、交流の実態は漁民の交流であった。この交流にのってわが国へ多くの文化がもたらされることになった。西北九州における水稲栽培の開始は、縄文晩期の山ノ寺式期（紀元前六〇〇年）までさかのぼり、夜臼式期には韓国に源流をもつ支石墓が、西北九州型釣針や石鋸の分布範囲を踏襲するかのように西北九州に集中的に分布する。以上の指摘から、著者は朝鮮海峡をはさんだ交流の持つ重要性を強調している。

第3章　全羅南道郡国里貝塚の卜骨――卜骨は、弥生文化形成に関与した朝鮮半島からの文化的影響の第2波に属する。稲作の伝播と直接的な関係は考えられない。朝鮮半島の卜骨の素材

は、シカ類が主でイノシシは稀であるが弥生時代の場合も圧倒的にシカ類が多い。これは朝鮮半島の傾向をそのまま踏襲したとみるべきである。また弥生時代の卜骨は、卜占を終えた後に人為的に打ち砕かれ、特別の埋め方をせずに捨てられている。朝鮮半島の場合も貝塚と住居址の出土例ばかりで、ここにも日本と共通点がうかがえる。日本では弥生中期に骨卜が、古墳前期に亀卜が伝播しているが、朝鮮半島や日本の卜骨は、中国東北部と関係があり、亀卜は楽浪ほか四郡を通じて中国本土と関連がある可能性を示唆している。

著者は貝塚茂樹氏の説や『史記』の例を上げ、占いの内容は多様であり、弥生時代の場合も戦争や航海の安全などを想定し、農事や天候関連のみが占いの対象では無かったとしている。

第4章　韓国の蘇塗と弥生時代の鳥形木製品――全羅南道今江里に見られるソッテは村民の平安と守護、そして豊作を祈願する村の信仰対象物である。韓炳三氏は忠清南道大田出土のソッテが描かれた青銅器について、農耕に関係する図柄とみなしている。これに対して著者は、『魏書東夷伝馬韓条』の蘇塗は、境界表示の機能がしめされたものとしている。そして韓国のソッテは、紀元前3世紀ころより現在に至るまで伝統的な信仰形態であり、災害を防止し村の平安を祈る境界表示として村の入口に立てられたとみる。鳥の種類は、カモ類が多く、カラス、カリ、トキ、カササギなどがあり、凶兆を知らせる鳥とみなす。そしてソッテは農耕儀礼との関係は必ずしも強くないと結論づけている。そのうえで、著者は日本出土の鳥形製品について、出土状況、鳥の形態学などを検討し、貫通孔などがあるものは、韓国のソッテと同じように柱の先につけられて村落の入口に立てられた境界表示であるとしている。

第5章　滴水瓦伝播の国際的背景――滴水瓦の形態的特徴は、瓦当面の下端が倒三角形に拡大している点、瓦当面と本体のなす角度が通常の九〇度ではなく一二〇度の傾斜をもつ点にあり、その機能は装飾性、垂木の保護、雨水のまくれ防止にある。著者はモンスーン地帯の日本列島では、雨水のまくれ防止に重点があるとみている。滴水瓦は北魏後期の中国に出現する。朝鮮半島へは李氏朝鮮時代に伝わり、日本には文禄・慶長の役の後に、沖縄へは16世紀初頭に伝わる。その時期は中世から近世への転換期に当たっており、東アジア世界の政治的動向との深い関係が推察される。日本への滴水瓦の伝播には、(1)直接に製品が李氏朝鮮からもたらされた例、(2)文禄の役以降に伝播したもの、(3)およびそれらが拡散したものとに分けられる。

文献によると琉球には明の萬暦年間（一五七三-一六一九）に中国人の瓦工をよんで瓦を作らせたと言う。出土地点は不明だが「萬暦三十三年」（一六〇五）という篦書きの瓦質浅鉢が出土している。また那覇市涌田古窯址群は独特な窯体構造で、中国南方には類例がなく、むしろ北京など北方地区に源流がある。民間レベルの伝播ではなく、政治的中心地区からの伝播であるとみなしている。中央アジアの西夏王国には、すでに12世紀に

滴水瓦が伝播しており、その時期差のもつ意味について比較検討を行う必要があると述べている。以上から著者は日本列島における造瓦史を、形態、造瓦技術とその伝播経路、階層性などを基準に以下の3期に区分している。

第1期　朝鮮半島の三国より、初めて瓦が伝わった飛鳥時代から中世までで、寺院や宮殿・官衙などに用いられ、一般庶民層には普及しなかった。

第2期　滴水瓦の伝播や量産体制を示唆するコビキB技法に代表される近世以降から敗戦まで、類焼防止のため大都市では一般庶民層にまで普及した。

第3期　ヨーロッパ系の様々な形態の瓦が導入され使用されるようになる今日に至るまでの時期。

第6章　木綿伝播の国際的背景――木綿の歴史的な変遷については、一部の研究者を除いては全く研究されていない。もともと大陸から高い階層性を伴って伝播し、最後に庶民層まで広がっていった歴史性が無視されている。文献によると木綿生産の開始時期は、平安前期の延暦18年または19年に三河に漂着した崑崙人が綿種をもたらしたという。著者は15、16世紀には兵衣などの軍用品として木綿は重要視され、また物資の大量輸送のために大型船木綿帆は欠かせないものだったとする永原慶二氏の説に対して、木綿帆の普及は八世紀になってからであって実証性に欠けると批判している。

承応元年より寛文元年まで来日した中国の呉　陳官によって、従来の打ち綿用の竹弓にかわり木弓がもたらされ、綿打ちの能率が向上し生産力が急激に増大した。この点でも永原氏の見解は国際的契機を無視し、理解が不十分であるとしている。著者は木弓による新しい綿打ち技術は、中国から日本に直接もたらされ、韓国には伝わらなかったとする角山光洋氏の指摘を追認している。日韓の木弓と竹弓の差は、綿布の普及した日本と、麻布の利用率の高い韓国との違いとして、他の多くの背景とともに現代に到るまで重要な影響を残しているという。

中国では元の元貞年間に、黄　道婆が海南島の黎族の綿打ち技術を習得して、綿繰り具と木弓とを江南地方にもたらし、綿業の発展に大きく貢献した。永原氏はこの事実認識がなく、綿業の技術的な基盤とその伝播に関する実証的な研究が欠如していると厳しく批判している。

そして永原氏の〈苧麻から木綿への移行は、日本経済史における中世から近世への転換を決定づけるものであった〉という見解は、成立しがたいと指摘している。そのうえで日本綿業の大きな転換期は、むしろ江戸前期と中期の間に存在する。網代帆の御朱印船と木綿帆の北前船の差は、まさにこのことを典型的に示すと結論づけている。

最後に著者は本研究を通して実践した問題点を強調する。考古学と民具学が連携して、学際的な視野から技術史的な研究を進めることが重要である。近年盛んになりつつある近世考古学を媒体として、物質文化史学を構築する可能性が大きくなってきた。考古学の目指していく方向は物質資料に基づく新しい歴

史学を構想していくことにあると結んでいる。

以上6章の扱った時代を整理すると、第1章は縄文時代と韓国の新石器時代、第2章は縄文時代から弥生時代にかけて、韓国では新石器時代から原三国時代にかけて、第3・4章は弥生時代、韓国の原三国時代である。そして第5・6章は安土・桃山時代から江戸時代にかけて、韓国では李氏朝鮮時代である。したがって中間の古墳時代から室町時代、韓国では三国時代から高麗時代にかけての時期については欠落している。当初の研究目的からみれば一貫性を欠くことを認めざるを得ないし、今後の重要な研究課題でもある。しかし現段階では、逐次時代を追って研究を進めることのほかに、その取り扱うべき時代の幅の広さを明示することもきわめて重要なことであると考えられる。

以上、考古学的資料と民族学ないし民俗学的資料を駆使して日本と朝鮮半島の交流の歴史を考察した渡辺　誠君の本論文は従来の日本考古学の範囲を越え、アジア史的な視点を展開させたものとして高く評価されるべきものである。研究の視野の大きさとともに、着実な資料分布にも極めて優れた同君の学問的力量をうかがうことができる。

本論文の冒頭において著者は歴史学研究における車の両輪として、文献史学に対する物質文化史の構想を述べているが、考古学の研究方法をとりながら、一貫性のある歴史叙述によって、その意図はみごとに達成されたと言えるであろう。

しかし、日韓交流の物質文化史が、これを以って完成されたわけではないことは、著者自身が序文において述べている通りであって、われわれはその構想がさらに展開されることを大いに期待するものである。そのためにも以下若干の問題点を指摘しておきたいと思う。まず第1章において著者は縄文土器出現の契機についてはとくに取り上げる必要はなく、問題とすべきはむしろ土器を発達させていく機能こそ重要だとする。しかし、この章の標題が縄文土器の起源であることを考えると、縄文土器の編年、形態、地域、時期別の変化といった基本的な問題について触れ、既存の研究成果の検討の上に立って自説の主張を展開してほしかった。縄文土器の平底化が製粉技術と関連するという見解については、技術が使用する道具の形態変化といかに結びつくのかという点の具体的検討が必要であるように思われる。

また、第4章において著者はソッテと農耕儀礼との関係は必ずしも強くないと結論づけている。しかし、ソッテが農耕儀礼や豊作祈願を否定しているわけではないので、著者の述べるように境界表示のみに重点をおくことにはなお検討が必要ではなかろうか。

日本における中世末から近世前半にかけての木綿産業の展開について述べた第6章において、18世紀における木弓による技術革新、木綿帆の普及、木綿製産の拡大という著者の図式は、永原慶二説の欠如を補う独自の考えかたとして評価できる。しかし、永原氏が木綿の普及と商品作物化が江戸前期にすでに一定の展開をみせていたとする説に対する著者の批判は、永原氏

の提示した史料、例えば寛永5年の定書などを検討する必要があろう。また、竹弓から木弓への綿打ち具の変化が、どの程度の技術革新をもたらしたのかについて、著者の重要な成果となる点だけに、もう少し説明がほしいところである。

以上若干の注文を付記したが、それは本論文のすぐれた価値をいささかも減ずるものではない。著者の構想が今後さらに発展し、展開することをのぞむが故に、あえて指摘したまでである。本論文が多くの点で日本考古学研究の最先端の方向を提示したものであり、その成果が第一級のものであることはあえて多言を要しない。よって本論文の著者、渡辺　誠君は文学博士の学位を受けるにふさわしいものと判定する。

論文審査担当者

主　査　慶應義塾大学文学部教授
　　文学研究科委員・文学博士　　近森　正

副　査　慶應義塾大学文学部教授
　　文学研究科委員　　鈴木公雄

副　査　早稲田大学文学部教授　　岡内三真

学力確認担当者　慶應義塾大学文学部教授
　　文学研究科委員・文学博士　　小川英雄